

《第30回中国文化セミナー》開催報告
(中国に親しむ会を名称変更)

「哀愁の調べ、憧憬の響き ～二胡の歴史と魅力」



日 時：2012年1月27日(金) 16:00～17:30

場 所：四谷「長崎出島厨房」

講 師：渡里文恵先生

人 数：セミナー参加37名、懇親会参加33名

中国の文化に触れるイベントとして「第30回中国文化セミナー」が開催されました。今年は中国の民族楽器二胡について、四谷にあります「長崎出島厨房」をお借りして、二胡の演奏家であり指導にも力を注いでおられます渡里文恵先生にご講義をいただきました。

講師プロフィール

- ◆ NHK カルチャーセンター青山教室、フェリス女学院大学生涯学習課、相模原市二胡倶楽部『二泉映月』二胡講師。
- ◆ 小学校時代を北京で過ごし、フェリス女学院中学高等学校、横浜国立大学経営学部卒業。
- ◆ 学生時代に日本で二胡を始めるが、更に深い習得を目指し、2001年北京中央音楽学院に留学。
- ◆ その後中国政府奨学金を得て、上海音楽学院で2年間学ぶ。更に南京師範大学音楽学院で修士課程に進み、二胡演奏法と指導法を研究、2006年修士号を取得し帰国。
- ◆ 留学中は張韶、呉之珉、黎松寿、朱昌輝といったベテラン指導者や若手演奏家にも師事し、二胡の演奏法ならびに中国における二胡文化の背景や中国民族音楽について学ぶ。
- ◆ 2004年南京市夏季音楽会出演、2005年江蘇省外国人才芸コンクール第3位。
- ◆ 帰国後は、2007年夏の帰国記念コンサートをはじめ演奏活動を続ける一方、二胡指導にも力を注いでいる。

最初に二胡は沖縄の音楽がよく似合いますと言われ、「涙そうそう」「さとうきび畑」など続けて3曲演奏いただき、参加者一同はじっと聞き入ってしまいました。二胡の親戚の楽器は3種類あり、「胡弓」は三味線に似た日本の伝統楽器で(越中おわら風の盆などで奏でる)広義では日本の伝統的擦弦楽器の総称。「胡琴」は現在では、おもに中国の擦弦楽器の総称で、以前は琵琶類のことを指し、そして「二胡」は胡琴の一種で中国の伝統的楽器とのことです。

まず二胡のルーツについて説明をいただきました：

二胡は擦弦楽器のうち馬の毛を張った弓で弦を擦奏する楽器であり、紀元前にアラブで発生したものが、西洋に伝わったものがバイオリンです。東洋へは2弦のものと3弦のものが伝えられ、2弦の発展型が二胡で、2弦を引き分けて演奏するために、バイオリンよりも難しいと



言われています。擦弦楽器は中国では唐の時代に初めて出現し、明の時代の終わりごろには現在の形状に近いものになってきます。

次に中国での二胡の発展について説明いただきました：

二胡は明の時代から清の時代にかけて大衆芸能と共に発展しましたが、特に江南地方のもののが羊から蛇に、弦が絹へと変化をとげます。さらにその後、弦が絹から金属へと改良されました。この頃「劉天華」という演奏家によって独奏曲がいくつも作られました。今でも二胡を習う方はまず初めにその曲を習うとのことで、その中の1曲「良宵」を演奏いただきました。

その後、1949年頃中国政府による積極的な中国の伝統音楽の継承改革によって、二胡が一躍独奏楽器の花形となりました。そして1954～66年にかけての民族音楽の発展期を経て、1966～76年代の文化大革命時代には一時中国民族音楽が軽視され伝統楽器が禁止となりましたが、1980年代になると再興をはたし黄金期を迎えます。1990年代には中国の近代化にともない、再び民族音楽は避けられる傾向になりました。それでも日本と比べると大学などの教育機関での民族音楽育成の場が多く、民間にもよく浸透しているとのことです。

次に日本への伝搬と広がりについてお話がありました。続いて日本音楽界における二胡の起用について紹介がありました。(詳細は会報誌に掲載)

お話と共に「蘇州夜曲」など日本人にもなじみのある曲、そして二胡の代表曲や中国の伝統的な曲などの演奏を交えながら講義をいただきましたので、非常に楽しくそして心地良く二胡について学ぶことができました。



セミナー終了後の質疑応答では、楽譜についてや二胡の実際の弾き方などについて多くの質問が出ました。二胡の楽譜は五線譜ではなく、数字で音階が示されています。日本人にとっては初めて見る譜で面白く感じました。

渡里先生にはそのまま長崎出島厨房で行われました懇親会にもご参加いただきましたので、いろいろな質問について懇親会の席でお答えいただきながら更に深く紹介が進んでいきました。

報告の詳細は、会報誌「日中建協 NEWS」No. 196号2012年2・3月号を参照下さい。